

Title	<書評>Havi Carel, Phenomenology of Illness Oxford University Press, 2016
Author(s)	岡本, かおり
Citation	年報人間科学. 39 p.113-p.117
Issue Date	2018-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67887
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈書評〉

Havi Carel,
Phenomenology of Illness
Oxford University Press, 2016.

岡本 かおり

はじめに

病気は私たちの在り方を変えることがある。突然何らかの病を発病することによって、留学や就職などの将来の計画が変更を迫られるとか、日々の生活にも人の手を借りなければならなくなるようなといった経験がありうる。そこで気づかれるのは普段の活動を暗黙のうちに支える様々な確かさの次元と、それらが実はいつ損なわれるかわからないという傷つきやすさや有限性である。本書はまさに〈病い〉という経験において明らかになる人間の在り方を記述することを試みている。

著者Havi Carel氏は、病いとヘルスケアについての現象学的な研究で知られるイギリスの哲学者である。現在はブリストル大学で哲学の教授を勤め、医学生向けの講義も担当している。著者は前著 *Illness: The Cry of the Flesh*, (Routledge, 2013) において、自身の呼吸器疾患の経験を記述し哲学的に考察している。本書でも著者は自身の経験に関する一人称的な経験の記述をおこないながら、病いの経験を哲学や現象学的な先行研究を参照することでより体系的に説明することを試みている。

本書の全体像

本書は大きくわけて二つの目標をもつ。第一は、哲学を使って〈病い〉の理解に貢献することであり、第二に哲学にとっての〈病い〉の役割を示すことである。もちろん各章の議論は上述の二つの目標に基づいているといえるが、基本的には第一の目標に対応する第一章から第八章までの議論と、第二の目標に対応する第九章にわけることができる。著者は第一章から第八章を通して、フッサール、ハイデガー、サルトル、メルロ＝ポンティといった現象学や〈病い〉に関わる先行研究の議論を援用することで、〈病い〉における生きられた経験の在り方を分析し特徴づけることを試みている。第九章ではそれまでの議論を総括しながら、哲学と〈病い〉の関係が新たに提示されている。

本書の構成

以下では各章ごとに要約をおこなう。

導入では、本書の目的と構成、方法論が語られる。その冒頭では、〈病い〉の経験が人間の経験の重要な部分でありながら、哲学ではあまり取り上げられてこなかったことに注意が向けられる。とくに哲学に

多くの議論をもつ「死」と対比される。

第一章では、まず本書の基本概念である〈病い〉illnessの内容が疾患diseaseとの対比から明らかにされる。なお、この議論はアーサー・クラインマンの議論を援用していると思われるが、具体的な言及はされていない。つぎに現象学の歴史が概観され、とくにフッサールとメルロ＝ポンティの議論が身体化の観点から紹介される。章末では、〈病い〉に関する現象学の先行研究として、S. Kay Toombs, Richard Zaner, Drew Leder, Fredrik Svenaeus, Anna Luise Kirkengen, Matthew Ratcliffeらの研究が概観される。

第二章では、本書のフレームワークとなる理論が紹介される。最初に、S. Kay Toombsの〈病い〉を特徴づける喪失に関する議論が詳しく説明される。次に、現象学的な身体概念が紹介される。フッサールとメルロ＝ポンティの議論から、「対象的な身体」と「生きられた身体」の区別が導入される。さらに著者のサルトル解釈に基づいて、医療者と患者の関係が論じられる。章末では〈病い〉において身体がもつ独特な傷つきやすさを明らかにするため、サルトルの透明性とハイデガーの道具に関する議論がそれぞれ参照される。

第三章では、〈病い〉がどのような患者にどのような変化をもたらすかということが、心理的、社会的、身体的な次元から具体的に明らかにされる。まず、前章で紹介されたToombsの喪失に関する議論が再検討される。次に、〈病い〉における身体変容について呼吸器系疾患についての著者自身の記述に基づいて論じられる。続いて、〈病い〉が患者の社会生活にもたらす影響が明らかにされる。さらに、ハイデガーの概念である存在可能Seinkönnenのもつ妥当性が〈病い〉や老いの観点から検討され、議論の拡張が試みられる。

第四章では、〈病い〉の経験の核となるBodily certaintyとBodily doubtという二つの状態が考察される。章末では経験の潜在的な側面を明らかにするための有効な道具立てとして病理学について言及がなされる。

第五章では、「息切れの現象学」が試みられる。章全体で、著者自身の経験に基づいて「息切れ」という具体的な経験に関する記述が展開される。とくに「息切れ」によってもたらされた身体性や世界経験の変容が分析される。

第六章では、〈病い〉と幸福の関係が主に論じられる。健康な人が病気や障害を克服不可能な窮状と見なすのに反して、病気や障害は実際には幸福に関して根本な影響を与えないということが示される。さらに、回復が論じられる。

第七章ではハイデガー『存在と時間』における現存在の死に関する議論について、〈病い〉の観点から議論が展開される。死がもつ「不可能性の可能性」というハイデガーの規定に対して、William BlattnerとHubert Dreyfusらによる解釈を参照しつつ、著者自身による解釈が提示される。また、ハイデガーの死に関わる「本来性／非本来性」の規定についても〈病い〉の観点から批判が試みられる。

第八章では、患者と医療やケアに関わる専門職の人々との間にある非対称性の問題について議論が展開される。フェミニスト認識論におけるMiranda Frickerの認知的不正義の議論が参照される。章末では、患者と医療者が個別の〈病い〉について理解を促すツールキットが紹介される。

第九章では、第一章からの議論について総括がおこなわれたうえで、〈病い〉がもつ哲学的な役割が明

らかにされる。

重要なトピック

以下では、本書の記述を三つに整理して内容を確認する。

第一に、現象学の概念を〈病い〉の経験に適用することで、抽象的な概念により具体的な解釈を与えている。著者はフッサール、ハイデガー、サルトル、メルロ＝ポンティらの現象学を取り入れ、〈病い〉の経験に基いて彼らの概念に特定のコンテクストを与え、具体的に理解する仕方を示している。このことは読者に現象学の概念をより明確な仕方理解させることを可能にしている。さらに、著者は〈病い〉の経験のなかでいくつかの概念を解釈し直しより実践的なものになっている。

著者は第三章においてハイデガーによる現存在がもつ存在可能 *Seinkönnen* という規定を人間のモデルとして取り出し、英語で *ability to be* と言い換える。そして、このような *ability to be* がもつ人間像は人生の全体から見れば限定的なものであるとの見方を示す。というのも、*ability to be* という在り方は幼年期、子供時代、老年期を除いた人生の中間部分を捉えているに過ぎないし、障害や病気によって妨害されないような健康で自律的な成人の場合を捉えているに過ぎない。その意味で著者はハイデガーの *ability to be* が人間存在のある側面を捉えていることを認めつつ、人間がもつ〈病い〉と老いの観点から *ability to be* の裏面である *inability to be* という概念を提示する。この *inability to be* という在り方は、本書の最も基礎的な人間理解を表している。

また、著者はフッサールのエポケーがまさに〈病い〉の経験のなかで患者に現れるという独自の解釈を試みることで、〈病い〉がもつ哲学的な役割を明らかにしている（本書、第九章）。患者を暴力的な仕方哲学的な思索へ導くものであり、その意味でフッサールのエポケーと同じ効果をもつという。〈病い〉は一種の暴力的な自然的態度の停止であり、標準的な哲学的省察よりも過酷な仕方哲学的な手続きを成立させるのである（本書、pp. 216-217）。本書の多くの紙面が、このようなエポケーによって明らかになる健康な身体がもつ潜在性と根本的な傷つきやすさを記述することに充てられている。

この〈病い〉によるエポケーの後によって現われるものとして、対象化が挙げられる。対象化において患者は二重の身体性をもつ。ひとつは、生きられた経験としての身体であり、もうひとつが対象としての身体である。このような対象としての身体とは、医療現場での医療者の視線によって可視化される。例えば、クリニックで血液検査を受け結果について聞くとき、そのような情報は感覚によっては知りえないものであり、自分自身にとって対象として身体が現れる。そして、このような身体の対象化は疎外感をもたらす。

第二に、本書は S. Kay Toombs を始めとした〈病い〉に関する現象学的な先行研究を数多く取り入れ、〈病い〉という経験をより包括的な仕方理解することを可能にしている。それによって精神疾患と呼吸器疾患のような異なる特徴をもつ経験が、現象学的に見てどのような差異をもつのかということを明らかにしている。

例えば、著者は第四章において身体的な慢性疾患の経験を、身体的疑念という概念で記述している。そもそも私たちの日々の生活や普段の経験は、身体がそれまでと同じように動きつづけることを暗黙理に前

提している。著者はそのような身体に対する信頼性を、身体的確実性 *bodily certainty* という。このような確実性は、それまで当たり前になしてきたことが不可能になったときにはじめて理解される。この身体的確実性が揺るがされた状態が、身体的疑念 *bodily doubt* である。この疑念は、非現実性、疎外、孤立の体験を引き起こす。また単なる信念のレベルの出来事ではなく身体的なレベルの出来事でもあり、それまで自然にもっていた身体的な能力に関する信頼は失われる。しかし、この身体的疑念は単なる身体的な失敗の感覚とは異なっている。著者によれば、身体的疑念は世界内存在がもつ最も根本的な感覚の崩壊である。つまり、身体的疑念においてそれまで親しんだ世界は異様なものへと変貌する。著者はこのような疑念の例として、呼吸器疾患の患者が一般に報告する恐れを例にあげている（本書、p. 96）。それは「息ができなくなる」という恐れである。これは急な息切れの体験に由来するもので、単なる心理的な状態に還元できるものではない。また具体的な恐れの内容をもつという点で精神疾患に由来する不安などとは異なるし、合理的な理由があるぶんパニック発作などとも異なっている。

第三に、著者は患者とそれ以外の人々の間の〈病い〉に対する見方の差異について問題性を明らかにし、本書の第六章と第八章においてそれぞれ異なる観点からこの課題に取り組んでいる。第六章では、〈病い〉をもつ人と健康な人で〈病い〉に関する見方が異なることについても明らかにしている。そのような例として健康な人々が〈病い〉を克服不可能なものであるとみなすのに反して、〈病い〉においても幸福に生きることが可能であることを複数の社会調査の結果を用いて示している。このような当事者と非当事者のギャップが生まれる理由について、Daniel Gilbert と Jonathan Haidt らの想像力に関する心理学的な議論を援用して説明を試みている。そこで、示されるのは身体的な条件において根本的に異なる人生を想像する能力は限定的であるということである。第八章では、医療現場において患者の言葉が軽視されるという問題について、Miranda Fricker の認知的不正義の議論が援用される。認知的不正義は証言的不正義と解釈学的不正義の二つにわけられる。前者は聞き手が話し手にわずかな信用性しか認めない場合に、後者は話し手が自分の経験を語ろうとする際に解釈上の資源に関するギャップが話し手を不利にする場合に起こるとされる。

おわりに

本書では著者自身の経験とその一人称的な記述を含みながら、同時に多くの理論を取り入れ体系的な〈病い〉の現象学の構築が目指されている。しかも、医療者や健常者との関係についての記述をもちながら、基本的には患者にとっての〈病い〉の記述と理解が主眼に据えられている。著者の叙述はこのような患者の視点から、現象学的な概念についても新たな理解をもたらしている。

さて以下は評者の課題だが、「病の現象学」というものを考えるうえでは当事者以外の立場から経験を記述することも可能だろう。例えば著者が述語化している *ability* と *inability* のような何かが出来るや出来ないという経験は、周囲の環境や技術にも依存するため、ある場面では社会的な経験として現れてくる。例えば、伊藤亜紗は視覚障害者と健常者が美術館で話をしながら絵画を鑑賞するソーシャル・ビューという取り組みを紹介している¹⁾。この取り組みにおける「見る」ことは、健常者が一人で見るときの体験と

も異なっている。そのため、「見る」ということに関するステレオタイプ化された ability と inability について、全く違う経験として間主観的に記述することができるだろう。これは〈病い〉に関する経験ではないが、〈病い〉においても同様の間主観的な経験がありうるだろう。

また、医療者が〈病い〉をどう捉えているかという点について、医療者やケアの側の経験に関する現象学的な研究から患者側にも気づくことがあるのではないだろうか。とくに日本国内では現象学的な看護研究が相次いで発表されており、ケアにおける豊かな経験構造が明らかにされている²⁾。

本書で提示された患者の立場からの〈病い〉の現象学は、同時に間主観的な経験の記述を目指す〈病い〉や老いの現象学にとっても多くの示唆を与えうると評者は考える。本論がその一助となれば幸いである。

注

1) 伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社新書、2015年)

2) その主な成果として、西村ユミ『看護師たちの現象学』(青土社、2014年)、同『看護実践の語り——言葉にならない営みを言葉にする』(新曜社、2016年)、村上靖彦『仙人と妄想デートする——看護の現象学と自由の哲学』(人文書院、2016年)